

# 歴史遺産の復元

——江戸時代のからくり玩具——

鎌 田 道 隆

## はじめに

「おもちゃ」という言葉には、今日の日本では子供の遊び道具、すなわち悪く言えばお粗末なもの、よく言えば子供の成長を補助する教育的遊具といった幅のある意味がある。もっとも最近では、高価なコンピュータなどゲーム機も、いわゆるおもちゃと考えられたりするから、一概に安価なもの、粗末なもの、単純なものとは位置づけられなくなっている。だが、英語のtoyにはくだらないものといった意味もあり、フランス語のjouetにも笑いのものになるといった意味があるなどと指摘されるように<sup>①</sup>、やはり子供だましといった低い評価がおもちゃの歴史のなかに、ひとつの要素として存在したことは認めなければならない。

こうしたおもちゃ観が定着していたからであろうか、たとえば歴史学の分野で正面からおもちゃをとりあげて、研究テーマとして広範に学会などで論じられたりしたことはない。またおもちゃが文化財や歴史遺産として認識され、高い評価をあたえられたということもほとんど聞かない。これまでおもちゃに関する学術的な研究が行われてこなかったことが、正当な評価と認識を欠如させてきた要因であると考えられる。

奈良大学において進めてきた江戸時代のからくり玩具の復元研究から、おもちゃの文化的価値、現代における歴史遺産的位置づけについて試論を展開してみよう<sup>②</sup>。なるべく具体的事例をあげながら、その復元の過程で発見したことにも論及したい。実際に復元という作業に取り組むことで、

おもちゃの素材である木・竹・紙・糸・土などの自然素材に対する江戸時代の人々の愛着と認識の深さを発見することができるし、自然素材の特長を生かしながら、すぐれたアイデアと技術によって、すばらしいおもちゃをつくりだしていった昔の人びとの知恵と工夫、人間としてのさまざまな思いやり・やさしさなども実感することができる。

鑑賞用のおもちゃである人形や器物などは別として、おもちゃ本来の意味すなわちもてあそびぶつのはとんどは、手で持ち遊ばれることによって破損する運命にある。江戸時代のおもちゃの大半は破損し廃棄された。したがっておもちゃの実物が伝存していることは、現在では例外的ですらある。それでも明治・大正期にはそうした遺物に出会う機会もあったようで、同好の士によって蒐集され、模写されたりして、『うないの友』をはじめ玩具図版が少なからず残されている。<sup>③</sup>

江戸時代の絵画や随筆のなかに記されたおもちゃの外形や説明、そして明治以降の玩具研究の成果を参考とし、また郷土玩具というかたちで現在に伝えられている伝統的なおもちゃに学びつつ、江戸時代に庶民の間で考案され、もて遊ばれたからくり玩具の復元について述べよう。からく

り玩具は、手で動かすことが前提となっているので、手の動きの先にしくまれましたいわゆる仕かけの部分に、昔の人々のアイデアや工夫が見えやすい。

## 一 唐独楽

おもちゃとしての独楽の歴史は古く、しかも世界的な広がりをもつ。木製・竹製・貝製・土製・石製・金属製・果実製などその材料も地域によってさまざまであるが、いずれもクルクルとまわりつつける動きに、不思議な靈力や神秘性を感じたものと思われる。

唐独楽(とうごま)の名称の由来は、昔から中国には空鐘という独楽があつて、これが日本へ伝わりトウゴマとよばれるようになったという。『和名類聚抄』に独楽というのは孔のあるものであると記されており、<sup>④</sup>中が空洞で孔のある独楽すなわち唐独楽がすでに平安時代には知られていたことがわかる。しかし、唐独楽がおもちゃとして広く庶民に知られるようになるのは江戸時代のこと、江戸時代には半鐘独楽、ごんごん独楽、象独楽などもよばれ、また竹製であったところから竹独楽ともよばれた。うなり独

楽という異称もある。

竹独楽以外の別称は、いずれもこの独楽の発する音によっている。ごんごん独楽・半鐘独楽は、ごんごんという鐘のひびきに似た音という意味であり、象独楽とかうなり独楽というのは、動物のうなり声に似ているということから名付けられたものである。文政十三年刊の『嬉遊笑覧』には、唐独楽のひびきが象のうなり声に似ているというので、長崎では象独楽とよばれているけれども、象のほんとうのうなり声を知っている人は少ないという話を載せている。<sup>6)</sup>

唐独楽については、安永二年刊の『江都二色』や、寛政九年刊の『長崎歳時記』にその絵があり、嘉永六年刊の『守貞漫稿』には絵とともに作り方の一部も説明されている。京坂ではもっぱら神社や寺院の祭礼や縁日に、その門前・境内で売られているとも説明されている。上方落語の『天王寺詣』にも彼岸のときの竹独楽売りの光景が語られているし、実際に大坂では四天王寺の縁日で売り出されるおもちゃのひとつとして、竹独楽は有名であった。唐独楽は、とくに西日本を中心に流行したようであるが、おそらく材料となる竹の入手が容易であったことも関係しているのであろう。ちなみに、現在でも唐独楽と同類の音の出

る独楽が土産物として売られていたりするが、江戸時代の円筒型の独楽とは異なっており、木をくり抜くロクロの技術が生かされている。これなどは東北地方の竹を手に入れないくい地域で発達した技術が、こけしなどと同様におもちゃに応用されたものである。

唐独楽は、大小いろいろにつくれるが、標準的なものは、直径が七、八センチの真竹を用いる。竹筒はかならずしもすべてがまん丸となっている訳ではないので、なるべく円型に近いものを選ぶのがよい。この竹の節がないところを長さ十センチほどに切り、これを独楽の胴とする。竹筒をたてて、上から三センチ、下からも三センチの垂直に並ぶ位置に、キリかドリルで二カ所に穴をあける。二カ所の穴の間をナイフまたは小刀で、すこしずつ切り取り、溝幅約五ミリ長さ四センチの風穴をあける。そして外側の溝幅五ミリはそのままにして、穴の内側すなわち竹筒の内側に溝を広げるように、ナイフを上手に使って切り取る。このとき片一方だけではなく、両側ともに削り取ると、独楽が左右のどちらの方向にまわっても音を出すことができる。この風切り穴の大きさと内側に四十五度以上くらいに鋭角に切れこんだ角度が、よい音を出すコツだというのが、試

行錯誤の結果判明した。

つぎに、竹筒の上と下を板で空気がもれないようにふさぐのであるが、『守貞漫稿』では桐の板で、竹筒の内側にびったりとはめ込んだ絵となっている。もちろん、板は桐でなくとも桧や杉でも全く差しつかえない。『守貞漫稿』のように内側へのはめ込み式でもよいが、竹筒の上下から板をかぶせ、竹筒の外周に沿って余分な板を切り取る方式の方が作業は楽かもしれない。にかわと木工用のボンドを用いて、空気漏れがないように密着させることが肝要である。

胴部の外側一カ所にたて長の溝があいた円柱ができあがったら、上と下の板の中央にキリで穴をあけ、独楽の心棒を通す作業に入る。心棒は二十センチから二十三センチくらいの長さで、竹の丸箸が太さもちょうどよいので代用できる。心棒は円柱の底板から二〜三センチ下方に突き出した位置で固定する。心棒と上下の板の穴との間から空気ももれないように、また心棒だけがクルクルとカラまわりしないように接着する。

以上で唐独楽の本体はできあがりだが、これをまわすために、江戸時代の人々はひとつの器具を用いている。少し

太目のタコ糸で一メートル位のものを一本用意するが、ほかに厚さ三〜五ミリ、幅三センチ、長さ二十センチの竹べら（竹製のものさし状のもの）の先端部に直径五ミリ位の穴をあけた道具を使って独楽をまわすのである。すなわち、唐独楽の胴部から上に突き出た心棒（十センチ位の長さ）に下の方からタコ糸を順序よくまきつけて重ならないように心棒の上部まで巻き、そのタコ糸の先を、さきほどの竹べらの穴へとおしておく。唐独楽を立て、心棒の先端と竹べらの穴を密着させておいて、片手は竹べらもち、もう一方の手で穴を通してあるタコ糸を握り、タコ糸をもつ手を思い切りひっぱると、唐独楽は勢いよくまわりはじめる。

竹べらを使ってまわすと、両手に心棒をはさんで手のひらをすり合わせてまわすのに比べ、はるかに回転速度が早い。あまりに回転速度が早すぎて直後には音が聞こえない場合があるが、しばらくしてスピードが落ちてくるに従い、徐々に独特の音がしてくる。狭い部屋では反響音もありかなり高い音に聞こえる。鐘の余韻に聞かぬか、象のうなり声と聞こえるか、竹筒の太さや風穴の大きさでも、ずいぶん音はかわってくる。

唐独楽は江戸時代の庶民のおもちゃであるが、昔の人々

の知恵と工夫がさまざまにこめられている。竹に対する知識や竹を工作する技術をはじめ、先人たちのアイデアの豊かさは、ヒトの能力を最大に生かそうとする竹べらの考案などまで含めて、きわめて人間的である。

## 二 猫と鼠

猫は鼠を追いかけまわすもの、そして捕えて餌として食べてしまうものだということは、かつては小さな子供でも知っている常識であった。そして、それは猫の習性なのだとほとんどの人が理解していた。しかし今日では、猫は人間の遊び相手すなわちペットとなり、かわいがって育てられるようになった。たとえ鼠を見つけたとしても、猫が真剣に鼠を追いかけてまわしたり、運よく捕えた場合でも食べてしまうといった光景は見られなくなっているのではないかと思う。昔の猫が働き者で、いまの猫がなまけ者になり、猫の習性が変わってしまったという訳ではない。

かつて、米や麦などの穀物や木造の家屋を鼠の被害から守るために、民家では猫を飼育していた。それぞれの家庭では猫に餌をあたえるとき、いつも満腹にならない程度に

少な目に餌の量を減らしておくという工夫をしていた。猫は空腹をみたすために鼠を捕食していた。このため鼠は猫の姿をみたり鳴き声を聞いたりすると一目散に逃げ、猫は鼠を追いかけまわしていたのである。

このような日常生活のなかの猫と鼠の関係を、たくみにからくり仕掛けのおもちゃとしてつくりあげてみせたのが、「猫と鼠」である。外観は、手の平におさまるほどの大きさの木製の箱があり、その箱のフタの上につくりものの猫がのせてある。箱のフタをひっぱってスライドさせると、猫が後退したように見える。猫がさがると、箱の中から鼠が姿をあらわす。次にフタを押して猫を鼠の方に近づけると、鼠はあわてて箱の中にもどって姿を消してしまう。この猫と鼠のおもちゃは両者の追いかっこをコミカルにひとつの箱を使っておもちゃとして完成させたもので、江戸時代の玩具のなかでも、とくに高い評価をあたえることができるものの一つである。

猫と鼠は、江戸時代のおもちゃ絵本である『江都二色』（一七七三年刊）に絵が紹介されている。図柄はオレンジ色の木箱で、フタが半分ほどあけてあり、フタの上には首にリボンを巻き尻尾をたてた三毛猫がのっており、箱の中

から立ちすがたであらわれた鼠と向い合う構図となっている。箱の内部は斜め上から見た感じで描かれているので、明瞭ではないが仕掛けらしいかたちが白色と黒の描線で示されている。そして「おそろしき猫またばしのしら波に、人ハねずみと逃げかくれ里」というざれ歌が添えられている。歌の意味は、おそろしい猫またという化物と、江戸の小石川（現在の文京区千石四丁目北部）に架かる猫また橋とのかけ言葉、さらに盗賊の異称しらなみと、ねずみをもかけ言葉にして、善良な庶民は皆逃げかくれるといった、たわいのないもので、この歌は猫と鼠のおもちゃについて解説しているわけではない。

猫と鼠のおもちゃは、明治から大正・昭和にもからくり玩具としてもてはやされ、一時は外国へも輸出されるほど人気があったと伝えられている。しかし、この明治以降に伝承された猫と鼠は、からくり仕掛けと全体の構図が、江戸時代のものとは少々異なっている。おそらく、人気商品として明治以降に大量生産するために、若干の変更をしたのではないかと推測されるが、あるいは、江戸時代にも『江都二色』型のほか、明治以降型のものもすでに両者が并存していたのかもしれない。

以下、復元について述べるが、ここでは『江都二色』型の場合としておく。また木箱の大きさは、片手で箱をもって、もう一方の手でフタを操作することを考えれば、手のひらに乗せられるか、あるいはすっぽりと手のひらの中に入れてしまいうくらいの大きさがよい。上フタは、前後にスライドできなければならないから、箱の両側板の上部に、フタの両端がとおる溝を彫っておく必要がある。フタを中央部付近まで引いて箱をあけたときに、鼠が箱の中から姿をあらわす。『江都二色』の絵では、猫はフタの一番先端に位置して描かれ、鼠は猫から少し距離をおくように箱の奥側に立ちあがった姿となっている。

上フタの先端に猫のつくりものを粘土等でつくって着色し、接着しておくが、鼠も同じように粘土で立ち姿につくって着色しておく。ただし、鼠は箱の中へ隠れたり、外へ姿をあらわす動きがあるので、からくり仕掛けを考案し、そこに取りつけなければならない。

鼠が動くからくりは、箱の中央部付近に回転軸をつくり、この回転軸からのばした腕部の先端に鼠を置く仕掛けがもっとも単純であり、実用的であろう。『江都二色』の絵では半分開いたフタの先端の下から湾曲した白い腕部がのびて、

その先から鼠が立ちあがっている。回転する軸の取りつけ位置は、箱の深さや、腕部の湾曲の度合いにもよるが、上フタの少し下で箱の両側板に穴をあけてはめ込むのがよい。

腕部はなるべく軽いものという点から紙製がよい。スリコギなどの円柱状のものに厚紙を重ね張りして作ってもよいが、トイレットペーパーのロール芯を箱の幅に合わせて切り、これを二つ割りにしたもので代用できる。半割にした一端を回転軸に取りつけ、もう一方の端に鼠の尻尾を接着する。

鼠があらわれたり隠れたりするのは、回転軸の円運動に よるといふからくり仕掛けであるから、上フタを引いてあげたときに、回転軸からひっぱられて回転し、上フタを押しもどすと、ひっぱられている部分がゆるみ、鼠と腕部の重さで回転軸がもとに戻る工夫をすればよい。ここでももつとも単純な仕掛けを選択すると、回転軸に和紙を巻きつけて糊づけし、他方を上フタの裏に接着する方法であろう。

上フタの裏への和紙の接着は、上フタを半分まで引き、鼠が箱の上に姿をあらわす位置まで回転軸を回転させて、和紙をピーンと張るかたちで接着する。こうした作業は、底板をはずした状態で行なえば容易である。従って、箱の底板は、全作業の最後に取りつけるようにするか、あるいは

着脱しやすいかたちで取りつけるのがよい。和紙が切れた場合修理する必要があるので、底板は取りはずしが可能な状態にしておくのが望ましい。

以上が猫と鼠の基本的なからくりであるが、竹製の小さな笛でピーピーとなるものを用意し、これに紙製のふいごを加えて箱の内部に仕かけ、上フタを引いたら鼠がチューと鳴きながら姿をあらわす工夫もある。上フタを引く力で紙製のふいごを押し、その空気圧で笛を鳴らすしくみである。昭和期まで伝承された猫と鼠のおもちゃには、こうした仕掛けを実際に施した例もあった。

前述したように、猫と鼠はかつての日本社会で日常に見かけられた猫と鼠のおいかけっこを、一つの箱を使ってそれを示すという、すぐれたアイデアのおもちゃである。一個の箱を使って猫と鼠の関係を表現するという構想とともに、からくりの仕掛けも単純ではあるが、鼠の重さを重りとして利用したり、和紙の強さやわらかさをテープとして活用するなど、素材の魅力を十分に生かし、それらを組みあわせることで、思わぬ効果をあげている。

さらに猫と鼠の魅力は、現実社会では穀物や木造建築物に大きな被害をあたえることから憎まれるべき鼠を、猫と

鼠の追いかけてこというかたちで玩具化するおおらかさが見えることである。実際、江戸時代のおもちゃには、鼠がしばしば登場する。たとえば、クルクルと愛らしくまわる「まわり鼠」、頭としっぽを振りながら米を食う「米喰い鼠」などもその例である。

### 三 おもちゃの復元から学ぶもの

上記のほかに、江戸時代のおもちゃにはすぐれた作品が少くないが、そのほとんどは廃絶している。銭独楽、かわり屏風、御来迎、鯉の滝のぼり、ずぼんぼ、とんだりはねたり、紙つばめ、管人形、からくり奴、知恵の板、鯛つり、俵ころばし、のぼり猿等々はその代表である。これらは、明治以降に玩具が販売を目的として大量生産への道をたどったので、機械生産・工場生産に不向きなものとして淘汰され廃絶されていたものと考えられる。決して玩具としての魅力や評価が低かったからではない。

廃絶した玩具は、いずれも手作りで愛情がこめられたものが多い。しかも自然素材である木・竹・紙・土・糸などが中心で、手ざわりの感触のよさと、環境的面からもやさ

しさがある。とくに、日常生活のなかで上記のような自然素材に接する機会が少くなっている現代社会では、自然素材との触れあいや、手づくりの作品との出会いは、いよいよ大切になりつつある。しかも、江戸時代のおもちゃは、そうした自然素材の特質を最大限に生かして加工し、それをいくつも組みあわせながら素朴なアイデアを加え、大人も子供もともに楽しく遊べる玩具として完成されている。

江戸時代のおもちゃは、子供だましとか、大人にとってはくだらないものという評価は通用しない。おもちゃは、大人が遊んでも楽しく、子供とも共有しあえるものとして位置づけられる。おもちゃには、人間的な愛情やさしさ、すぐれたアイデアや技術が随所にこめられている。江戸時代のおもちゃの復元からは、自然と人間について多くを学ぶことができる。

江戸時代のおもちゃには、江戸時代の社会における人々の営みが深く刻みこまれている。とりわけからくり玩具には、昔の人のアイデアや工夫や技術が、見えやすいかたちで織りこまれている。これはまぎれもなく日本の文化財・歴史遺産のひとつである。

註

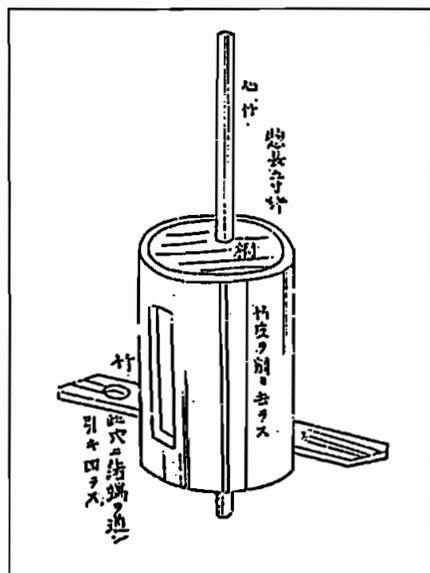
- (1) 和久洋三「玩具」(平凡社大百科事典)一九八四年)
- (2) 奈良大学文学部鎌田研究室の共同研究の一つとして、「江戸時代のおもちゃとあそび」のテーマのもとに、一九八六年から江戸時代のからくり玩具の復元研究をすすめてきた。その成果の一部は、鎌田道隆・安田真紀子共著「江戸時代で遊ぶ本 からくり玩具をつくるう」(河出書房新社、一九九八年)に紹介している。
- (3) 有坂与太郎「日本玩具史」、川崎巨泉「おもちゃ画譜」、武井武雄「日本郷土玩具」、児童用具研究会「日本玩具集」、古樵亭主人「遊宝」など、大正期を中心に、昭和前期にも数多くの成果がある。
- (4) 半澤敏郎「童遊文化史」別巻(東京書籍一九八〇年)八一〜二七頁参照。
- (5) 半澤敏郎「童遊文化史」第二巻、二七九〜二八四頁には、「和名類聚抄」以下「色葉字類抄」などから、中国からの独楽の渡来と「有孔」独楽について考察している。
- (6) 喜多村信節「嬉遊笑覧」巻六(名著刊行会一九七〇年)一四一頁に「長崎歳時記」から「象のうなるにたとふといへども象の声しるものすくなし」と記している。
- (7) 喜田川守貞「守貞漫稿」(近世風俗志)第二十五編・名著刊行会一九七九年)三一―九頁。
- (8) 「守貞漫稿」(同右三二九頁)の図中の上板に「桐」の文字が見える。

(9) これも「守貞漫稿」の図中に、穴をあけた竹板が示されている。参考図参照。

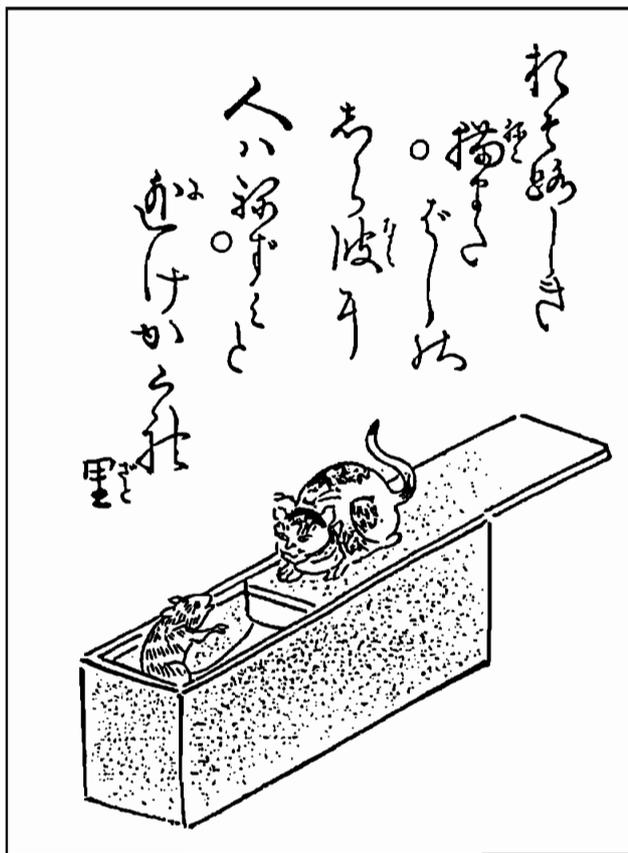
(10) 川崎巨泉の「おもちゃ画譜」や斎藤良輔「郷土玩具辞典」(東京堂、一九七二年)に紹介されている図や写真では、猫がフタの中央部に位置し、鼠は半分ほど開いた上フタの先端に接するところに水平のかたちで姿を見えている。

〔参考図〕

「守貞漫稿」所収 唐独楽



『江都二色』所収 猫と鼠



『おもちゃ画譜』所収 猫と鼠

